

山形国際ドキュメンタリー映画祭2013へのメッセージ

ワン・ビン
王兵 (映画監督)

慌ただしい日々の中、また2年が過ぎた。この間なおも私は、ドキュメンタリー映画を通して、この世界の無数の美しい魂を感じ取ることが許されてきたことに感謝している。ドキュメンタリーは、この時代における最も素晴らしい芸術様式である。ドキュメンタリーは私たちの生活に分け入り、真摯であり続け、自分自身を見つめ直す機会を与えてくれる。私は、ドキュメンタリーが、未来の映画文化に進歩をもたらす、最も重要な力となることを信じている。山形国際ドキュメンタリー映画祭が、映画の独立した価値観を保ち続けていることに賛辞を送るとともに、2013年の山形国際ドキュメンタリー映画祭の成功を心から祈っている。

2013年9月13日 北京にて

(秋山珠子訳)

ウー・ウェンガン
呉文光 (映画監督)

1991年、初めて参加したヤマガタから中国に戻った私は、「山形映画祭——インディペンデント・ドキュメンタリー監督の家」と題するエッセイを発表した。そこにこんな一節がある。「私たちのように、世界の片隅で孤独と戦っているインディペンデント・ドキュメンタリー監督たちにとって、ヤマガタの存在は、帰るべき家のようなものであり、どんな孤独の中でも思い続ける憧れであり、ドキュメンタリーを作り続ける力の源泉なのである」。あれから22年経った。私はもう7回も「家」に帰ることができた。そして出来ることなら毎年帰りたいと願っている。

(秋山珠子訳)

アピチャッポン・ウィーラセタクン (映画監督)

YIDFFは、私の作品——白黒の短篇映画——をスクリーンにかけようと言ってくれた初めての映画祭である。幸運だったのは、ここが映画祭と、また真の映画と恋に落ちるのにうってつけの場所だったからだ。それゆえこは、全てが始まるきっかけを与えてくれる——私にとってはそうだったし、来るべき世代にとってもきっとそうなることだろう。

(中村真人訳)